

第31回 ハンノキ

カコちゃん ショウくん かほくがたナルドレシ



河北潟では昔、秋に刈り取った稲を干すため「はさ木」という、田んぼ脇の水路に沿って一列に植えられた並木がありました。通常、はさ木にはハンノキが使われていました。夏は農作業の休憩場所となる木陰を提供し、舟の行き交う水路とともに河北潟の水田風景の重要な要素でした。

しかし、現在では舟の行き交う水路も、はさ木もなくなってしまいました。農業の近代化とともに圃場整備が進み、水路も多くは農道となり、行き交うのは舟から軽トラに変わりました。コンバインと籾の乾燥機も開発され、手間のかかる天日干しが必要なくなり、はさ木も切られ、河北潟周辺地域の水田の風景は一変しました。

ハンノキは、低地の湿地に生える樹木で、カバノキ科に属しています。この科の特徴として、枝先から長く尾状に垂れ下がる雄花序（雄花が集まったもの）をもっています。雌花の集合体である雌花序は、松ぼっくりを小さくしたような形をしています。この特徴的な雌雄の花序と、水辺に生育することで、ハンノキの仲間であることの判別は比較的簡単です。実際には、ハンノキの仲間には何種かあるので種の判断は難しいのですが、河北潟の湖岸に生育しているのは、ハンノキだけといって良いと思われます。

現在、河北潟でハンノキが生育している場所は、湊の野鳥観察舎の付近、金腐川や森下川や津幡川の河口、湖南大橋の付近など、湖岸沿いにみられますが、細くて小さな木がほとんどです。河北潟では、湖岸付近の地盤沈下が著しく、かつては湖の南岸には植生帯が広くみられハンノキの高木もみられましたが、水没のためほとんど失われました。

この傾向が続くと、ハンノキの生育できる場所は徐々に狭くなっていくものと思われます。

かつてはどこにでもあった、いわば普通の木ですが、河北潟からは珍しい植物になりつつあります。繁殖力は強い植物ですので、河畔林を構成することのできる環境が残っていれば消滅することはないと思われますが、河北潟本来の環境に生育する樹木の代表として、できるだけ大切にしたいと思います。数年前に、石川県の土木事業で大宮川の河口の掘削を行った際には、そこに一本残っていたハンノキを避けて掘削していただいたことがあり、そのハンノキは今でも残っています。このときの経緯については、ちょっといい話として、私たちのホームページに記事を残しています (<http://kaho.kugata.sakura.ne.jp/old/news/hannoki.html>)。

こなん水辺公園にもハンノキがありますが、公園整備の際に人為的に植えられたもので、もともと河北潟に生育していた系統とは異なるものようです。(文 高橋 久)